

聖書：創世 39：1～23

説教題：主が彼とともにおられ

日時：2024年5月12日（朝拝）

ヤコブ、すなわちイスラエルの 11 番目の息子であるヨセフは兄たちによってエジプトへ行くイシュマエル人の隊商に売られたことが 37 章後半に記され、最後の 36 節にこう記されました。「あのミディアン人たちは、エジプトでファラオの廷臣、侍従長ポティファルにヨセフを売った。」ヨセフはその後、どうなったのかと私たちには気になるころでしたが、38 章では四男ユダに関する話が挿入されました。そして今日の 39 章で再びヨセフの話に戻っています。39 章 1 節はその再開に当たって前回述べたことをもう一度まとめた部分です。「一方、ヨセフはエジプトへ連れて行かれた。ファラオの廷臣で侍従長のポティファルという一人のエジプト人が、ヨセフを連れ下ったイシュマエル人の手からヨセフを買い取った。」ヨセフは大変な苦難の中に投げ込まれました。彼は父ヤコブに愛され、特別な待遇を受けていましたが、そのことで兄たちに憎まれ、家族から引き離されたばかりか、遠い見知らぬ地で奴隷として働かされることになりました。まさに天国から地獄へ落とされたかのようなようでした。その後のヨセフはどうだったのでしょうか。

この 39 章で繰り返し出て来て強調されているのは「主がヨセフとともにいた」ということです。2 節と 3 節、21 節と 23 節の合計 4 回も記されています。ここからまず私たちは人間の目から見て悲惨な状況に投げ入れられたからと言って、神はそこにおられないということは意味しないことを知ります。ここにはっきりとエジプトで奴隷状態に落とされたヨセフと主がともにいたことが強調されています。ですから私たちも苦境に陥った時、主はここにおられないとか、主は私を見放されたと考えないようにしなければなりません。今まで経験したことのない厳しい状況に至ったとしても、なおその状況で主がともにおられるということがあるのだと教えられるのです。

ヨセフはこの苦境において、父ヤコブから聞いて来たアブラハムの神、イサクの神に祈ったことと思います。彼が主との交わりの内に生きていたことは、後でもはっきり分かる部分がありますが、3 節からも伺い知ることができます。そこに「彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た」とあります。主人ポティファルはエジプト人です。彼は主なる神を知りません。

その彼が、主がヨセフとともにいることを認めたということは、ヨセフが自分の信仰を隠さなかったことを意味します。彼が日々主に祈り、主により頼んでいることをポティファルは知っていた。そして彼のすることすべてが成功するのを見た。その時にポティファルは彼の背後に主がおられ、主がそのように彼を導いておられるということを見て取らずにはいられなかったのです。それでヨセフは4節にある通り、主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになりました。「主人の好意を得た」とは、ヨセフがポティファルの目に魅力的な人として映ったということです。他の奴隷たちと違って、少しもひねくれてはおらず、仕事は一生懸命、偽りはそこになく、いつもまっすぐで、信頼できる働きをしている。彼を見ていると背後にある神が彼に力を与え、彼を恵みで満たし、それが彼の人格に影響を与えて、あのような彼の魅力を作り出している。そのヨセフを主人は愛するようになり、ついにはその家と全財産を彼に委ねるようになり、まですたのびました。するとその時からポティファルの家は益々祝福されました。主の祝福が家や野にある全財産の上にあるようになりました。ポティファルは自分が食べる食物のこと以外は、すべてヨセフに任せるようになりました。奴隷の状態にある者がこのような位置にまで高められるとは信じられないようなことであり、ヨセフがいかに主人から深く愛され、信頼される者となったかを示しています。

さてこのように主がともにいてくださるなら、あとはすべてが順調に行くかという、そうではないということが続いて記されます。体格も良く、顔立ちも美しく、仕事も良くできるヨセフにポティファルの妻が目をつけます。そして「一緒に寝ましょう」と言って来ました。ヨセフはこれを拒みます。彼はそのようなことをすることは、私を信頼し、私にすべてを任せてくださった主人を裏切ることであると言います。そしてそのような悪事は何よりも神に対して罪を犯すことであると9節で述べます。ここにヨセフが神との交わりを何よりも大事に生活していたことが示されています。彼はこのエジプトにおいて自分を支え、自分を祝福くださっているのは神であるとの強い意識、また感謝を持っていました。ポティファルの妻と寝ることはもちろんポティファルに対する悪事ですが、それは単に人間同士の横の関係だけで考えられることではありません。それは何よりも神に対する罪です。罪を考える際、大事な点は、それは神への罪であるということです。性的な交わりについては神は結婚関係の中でだけ行われるべきものと定められました。創世記2章24節：「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」ヨセフはこれを破ることは何よりも神に対して罪を犯すことであって、私はそれはできないと退けます。これはルカの

福音書 15 章の放蕩息子のたとえでも同じです。父の財産を受け取ってさっさと遠い場所へ行き、湯水のように放蕩した後、悔い改めて父のもとに帰ろうとした弟息子は、父のところに行ってこう言おうと考え、また実際にそのように言いました。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。」ここで彼は自分が行った悪は父に対する悪である以前に、天に対する罪、すなわち神に対する罪だと認識しました。ヨセフも同じです。

しかしポティファルの妻は毎日毎日ヨセフに言い寄りました。ヨセフはこれを聞き入れず、そばに寝ることはもちろん、一緒にいることもしませんでした。しかしある日、家の中に一人もいなかった日、彼女は実力行使に出ます。彼女はヨセフの上着をつかんで「一緒に寝ましょう」と言います。これは単なる誘いと言うより、ほとんど命令です。「寝ましょう」と言うより、「寝なさい」という調子です。奴隷である者への上からの反抗を許さない言葉です。もしいくらかでも妥協する心があったらヨセフはこの誘惑の餌食になったでしょう。しかし彼は主を愛し、主を第一にする心によって、そこから逃げます。つかまれた上着は残したままで。この反抗を受けてポティファルの妻は侮辱されたと感じ、憤ります。そしてこのままヨセフが先に何かを話したのでは自分の分が悪くなる。そこでヨセフに濡れ衣を着せようと図ります。あのヘブル人の奴隷が私にいたずらをしようとした。私が声を上げて叫んだので、彼は慌てて逃げて行った。ここに残した上着が、ここで彼が何をしようとしたかを物語る動かぬ証拠であると彼女は主張します。この言葉を聞いて主人は怒りに燃えてヨセフを捕らえ、王の囚人が監禁されている監獄に入れました。ここで良く問われるのは、ポティファルは妻の言葉をそのまま信じたのかということです。19 節で彼が「怒りに燃えた」とありますが、何に対して、あるいは誰に対してそうだったのか明示されていません。そこには意味があると見る人たちもいます。おそらくポティファルはヨセフを呼び出し、彼に問うたでしょう。そしてヨセフは無実を訴えたでしょう。これまでヨセフを知り、深く信頼して来たポティファルのこと、ヨセフの弁明を聞いて何か違うと分かったのではないのでしょうか。また妻の性格も良く知っていたでしょうから、彼女の主張をそのまま受け止めることはできないとも思ったのではないのでしょうか。本来もし訴えられていることが本当ならヨセフは即刻死刑であったと考えられます。ポティファルがそのように処さなかったことは、彼が訴えられたことにある種の疑いを抱いたことを暗示すると言われます。しかしだからと言って妻の前で何もしないわけにも行きません。それでポティファルは王の囚人が監禁されている牢に彼を入れたのではな

いかと注解者たちは見ます。ヨセフはこうして死刑は免れました。とは言え、これが厳しい処置であったことは疑い得ません。この時のヨセフについて詩篇 105 篇 18 節にこうあります。「ヨセフの足は苦しみのかせをはめられ その首は鉄のかせに入れられた。」 これまで時間をかけて主人の信頼を勝ち取り、ようやくその歩みが上向いて来たのに、その積み重ねて来たものが一瞬にして台無しとされる扱いをヨセフは受けたのです。

私たちがヨセフの立場だったらどうでしょう。濡れ衣を着せて、このような場へ追いやったポティファルの妻を呪い、また主人ポティファルをも呪い、さらにはこういう理不尽を許す神を呪い、ただただ不満といらだちと怒りを口にするだけの人間になってしまいそうなどころではないでしょうか。しかし 21 節以降で私たちが見るのは何でしょう。それは今日の章最初のポティファルの家にいた時の様子の再現です。ここでも主がヨセフとともにおられました。そしてその主を見上げてまっすぐに生きる彼を見て監獄の長が彼を信頼するようになり、何と監獄にいるすべての囚人をヨセフの手に委ねるようになりました。囚人がすべての囚人の世話をするようになるとは信じられないようなことです。またヨセフはそこで行われるすべてのことを管理する者とされました。監獄の長はヨセフの手に委ねたことには何も干渉しませんでした。「それは、主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである」と最後の 23 節にあります。以前よりもっとひどい状態に落とされたのに、そこでも主との交わりを通してまっすぐに立ち、周りの人々から深い信頼を勝ち取り、大切な働きを委ねられるようになったヨセフです。そこからさらに新しい導きが与えられて行くのを私たちは次の章以降で見て行くことになります。

以上の箇所から私たちは今朝何を心に留めるべきでしょうか。三つのことを述べて終わりたいと思います。まず今日の箇所を読んで受けるチャレンジは、たとえ私たちがどんな状況に投げ入れられたとしても、そこでもともにいてくださる主との交わりを通してヨセフのように歩むことができるということです。私たちは自分が置かれた環境、特にその不遇、不運を嘆きやすいものです。もっと違った環境に置かれていたなら、もっと良い人間関係に恵まれていたなら、・・・と周りの状況を責め、周りにいる人々を責め、ああ自分は何とかかわいそうな人間か！と自己憐憫し、神に対してもつぶやきと不満の心で一杯になる。しかし私たちよりもっとひどい状況に置かれたヨセフはそれとは全く別の道を行っています。私たちが今日の箇所を通して仰ぐべきは、

たとえ自分がどんなに人間的に望ましくない状況に置かれても、そこでも神は私とともにおられるということ。その神との交わりによって私もヨセフのように生きることができるということです。誰かへの苦々しい思いを持ち、不平不満をいつも口にし、自己憐憫に陥り、人々から嫌われる人間となるのではなく、むしろ私とともにおられる神を人々に証しし、人々から好意を持たれ、信頼され、愛される人になって行くことができる。神はそのような力と祝福を私たちに与えることができるお方です。私たちはどんな中に置かれても、ともにいてくださる神を見上げて、この神がくださる祝福と力に生きる者とされたいと願います。

二つ目に神はヨセフとともにおられるなら、なぜ彼をポティファルの妻の企みから救い出さず、牢屋という一層ひどい状態に至らせたのかと私たちは思うかもしれません。その説明はここではまだありません。しかしこの後を読んで行く時に、それは次第に明らかにされます。彼は今日の章で監獄に入れられましたが、この監獄に入れられなければ、次の章で登場するエジプトの王の下で仕える役人に出会うことはありませんでした。またその役人と出会わなければ、さらに次の章で記される通り、エジプトの王ファラオの前に出ることもありませんでしたし、またエジプトと世界を飢饉から救う働きをすることもできませんでした。つまりヨセフが入れられたこの監獄は実はエジプトの王座へとつながる地下通路のようなものだったのです。ですから主はともにいるのにヨセフは牢屋に入れられてしまったのではなく、主はともにおられたので主は彼をこの牢屋へ導いたとさえ言うことができるのです。神は私たちの人生の上に明確な目的を持っています。私たちは苦しみの中では、その先にあるものを見ることができません。しかし神はその先の計画を持っておられます。その神の知恵と力に信頼して従う者たちとされたいと思います。

そして三つ目にもう一つ目的があると考えられます。先ほど詩篇 105 篇 18 節を引用しましたが、その次の 19 節にこうあります。「彼のことばがそのとおりになるときまで 主のことばは彼を錬った。」 この「錬る」とは「製錬する」とか「純粋にする」という意味の言葉です。つまりこれはヨセフ自身の訓練のためでもあったということです。これまでの場をわきまえずに何でも口から出してしまい、結局は自慢して人々から憎まれるような思慮の浅い彼では今後の働きは務まりません。彼が今後、厳しい状況でも粘り強く神に信頼し、人々に仕えることができる人になるためにも、神はこのような苦難の中で彼を錬っておられたのです。またこの苦難においてポティファル

の家の管理をしたこと、また監獄ですべての囚人の世話やすべての管理をした経験は、今後エジプト王の右腕として、大飢饉の際、陣頭指揮を執るためにも実際的に必要な学びだったと考えられます。神への信仰を錬り聖められつつ、その賜物もいよいよ磨き上げられるための時だったと言えます。

私たちもそのように考えたいと思います。思わぬ試練や苦難に投げ入れられたとしても、そこにも神の奇しいご計画があります。神はそこでも私たちとともにいてくださり、私たちがヨセフのように導いてくださることが出来ます。その神を見上げて神から力と励ましをいただき、神を証しする歩みをささげる者へ導かれたいと思います。神は私たちが今思うところをはるかに超えるさらに良いものをこれから先に備えてくださっていることを見上げて神に信頼し、必要な学びと訓練をいただき、神の最善の御心なるために豊かに用いられる者へと導かれて行きたいと思います。